

音順	方劑名	生薬構成 および製法・服用方法
	傷寒論・金匱要略条文	読み および解説・その他
まー2	麻黄加朮湯	<p>麻黄（苦温）3g・桂枝（辛温）2g・甘草（甘平）2g・杏仁（甘温）3g・白朮（苦温）4g 上の5味を水320mlを以って、先ず麻黄を煮て、80ml程減じ、他の4味を入れて90mlに煮詰め、滓を去り3回に分けて温服する。 服後は暖かく覆って少し汗を取るとよい。</p> <p>痙湿喝病脈証併治第二第20条（金匱要略）</p> <p>「湿家身煩疼するは麻黄加朮湯を与うべし、其の汗を發するを宜しとなす。慎んで火を以て之を攻むべからず。」</p> <p>解説 湿邪に侵されて、体がうずき苦しんで、ほてる者には、麻黄加朮湯を与えてやるべきである。麻黄加朮湯で、その汗を發してやるのが一番よい方法である。間違っても、火熱療法で發汗させてはいけない。</p> <p>麻黄加朮湯証は、元来、中湿を伴う體質の人が、表実（表位閉塞）を生じている場合で、麻黄湯で、太陽經の湿気を汗として發散し、白朮で、心下の蓄水を小便より下す。つまり、上と下から水を抜く。</p> <p>麻黄加朮湯証 身体が少し腫れて、關節が痛む時に用いる。關節の腫れは実腫で、發赤、腫脹が強く現われる。捻挫して、腫れて痛む時にも使える。本方の適応症には、小便不利で、鼻づまり、喘、頭痛、發熱などの症状も多少伴うこともある。</p> <p>「方劑決定のコツ」の注釈 發汗しても治らない場合があるのは、汗の發し方が強すぎたために、風の邪気だけが取れて、湿の邪気が残ってしまうために癒えないのである。風と、湿を治せんとする場合には、發汗させるのに、少しずつ、しっかりと汗が出たかなと思われる程度にかかせれば、風、湿が共に取れる。それには麻黄加朮湯を用いるとよいのである。</p> <p>麻黄加朮湯証 新古方葉囊によれば「身体がうずき痛みて耐へられぬ者、便通は普通に出るが小便は思ふ様に出ぬ者、身体が少し腫れぼったき気味ある者、或は皮膚の色少し黄味を有する者、喘息ある者、鼻塞りて通らず鼻汁多く出づる者。」と記されている。</p> <p>参考 氣虚を伴う中湿で、表虚の場合は、防已黄耆湯を用いる。 痺病（風寒湿の邪に当てられて、氣血の流れが阻害され、痛み、しびれを起こす病）の対処 發熱、自汗がある時は、桂枝加朮湯を用いる。 發熱、無汗の時は、麻黄加朮湯を用いる。 小便不利で、大便快なれば、茯苓甘草湯・桂枝去桂加茯苓白朮湯を用いる。 小便自利で、大便硬には、白朮附子湯（朮附湯）を用いる。</p>